症 例

尿膜管癌を合併した尿膜管小嚢胞の1例

東京都立墨東病院泌尿器科

三 方 律 治   今 尾 貞 夫   中 村   陽

69歳の女性が約1年間繰り返す、排尿時痛を主訴に当科を受診した。膀胱鏡検査では膀胱頂部に小さな嚢胞状腫瘤を認め、生検で異形細胞が見られた。臍尿管管摘除と膀胱部分切除とを行い、病理組織学的には壁に癌を合併した尿膜管小嚢胞であった。

索引用語：尿膜管癌、尿膜管嚢胞

はじめに

尿膜管嚢胞は、比較的稀な疾患であるが、これに癌を合併した症例の報告はさらに少ない。われわれは、癌を合併した。径約1cmの尿膜管小嚢胞を経験したので報告する。

症 例

症例は69歳の女性。家族歴既往歴に特記事項無し。約1年間繰り返す、排尿時痛を主訴に1995年7月17日当科を受診。当日の尿検査は糖(-)、蛋白(-)、沈渣では赤血球1-5/数視野、白血球5-10/1視野であり、尿培養陰性、尿細胞学的検査も陰性であった。無処置で経過を見ていたが、2週間後に症状は消失し、尿沈渣で白血球は陰性となったが赤血球が10-15/1視野となったために、膀胱鏡検査を行った。膀胱鏡的には膀胱頂部に径約1cmの嚢胞状腫瘤(図1)を認め、8月30日に入院した。尿路画像診断には異常所見無く、生検で細胞異形を伴う尿膜管嚢胞と診断された。このた

め、尿膜管癌に準じて臍尿管管全摘と膀胱部分切除とを9月12日に行った。病理組織学的には、径1cmの尿膜管嚢胞(図2)であり、嚢胞壁の上皮は異形細胞からなり、一部の上皮は嚢胞内腔へ突出していた(図3)。以上から尿膜管癌を合併した尿膜管嚢胞と診断された。患者は9月29日に退院し、1996年4月末現在再発

図1 膀胱鏡像(矢印嚢胞)

図2 病理組織像(H.E.染色, ×2)

図3 病理組織像(図2の部分的拡大, H.E.染色, ×10)

1996年5月14日受付 1996年7月17日採用

転移を認めていない。

考 察

尿管疾患の分類には辻の分類¹⁾，すなわち，1) 尿管の発生異常，2) 尿管嚢胞，3) 後天性尿管開放症，4) 尿管新生物が用いられることが多い。尿管癌や尿管嚢胞は比較的稀な疾患とされており，本邦では尿管癌は311例²⁾が，尿管嚢胞は172例³⁾が集計されている。また尿管嚢胞を合併した尿管癌の報告は非常に少なくわれわれの調べた範囲では4例に過ぎない^{4)~7)}。

尿管癌は男女比は2.6:1と男性に多く，41~70歳の症例が約2/3を占めるが，女性では60歳代が最も多い²⁾。その臨床症状は血尿が最も多く次いで膀胱刺激症状である²⁾。一方尿管嚢胞の男女比は1.3:1と男性がやや多い程度であり，その年齢は11~30歳が約1/3で若年層に多い³⁾。臨床症状は腹部腫瘍が最多で次いで腹痛である³⁾。尿管嚢胞の大きさは，4lに達するとの報告もあるが，豌豆大から鶏卵大までのものが多い⁶⁾。

本例を加えて5例の，癌を合併した尿管嚢胞症例は男3例女2例で，年齢は39歳⁷⁾以外は61歳以上で最年長は79歳であった^{4)~6)}。腫瘍の大きさは本例以外は鳩卵大から6×7×4cmまでであり^{4)~7)}，本例は極端に小さいと思われる。高齢者の膀胱頂部にみられる嚢胞状病変については，たとえ小さなものでも，生検で悪

性化の有無を確認する必要があると考える。

おわりに

癌を合併した尿管小嚢胞の69歳女性例を報告し，若干の文献的考察を行った。

病組織学的診断と写真撮影を賜りました当院病理科川原稜部長に心より感謝いたします。

文 献

- 1) 辻 一郎：尿管の先天性異常，小児泌尿器科の臨床。金原出版，東京，1962，p63—70
- 2) 原 芳紀，井田時雄：尿管癌の3例と本邦311例の臨床統計。西日泌 56: 570—572, 1994
- 3) 菊地悦啓，入澤俊氏，入澤千晶他：外尿道口より突出した尿管嚢腫の1例—本邦報告172例についての統計的観察—泌紀 35: 1777—1780, 1989
- 4) 緒方二郎，川添襄二：尿管癌（乳頭状移行上皮癌）の1例。皮と泌 25: 475—478, 1963
- 5) 竹内弘幸：尿管嚢腫について。癌の臨 9: 541—546, 1963
- 6) 梶谷雅春，上田昭一：尿管癌を合併した尿管嚢胞の1例—付，尿管癌と尿管嚢胞の本邦報告例の集計—。西日泌 40: 893—903, 1978
- 7) Suzuki M, Kishi H, Aso Y, et al: Urachal cyst complicated with carcinoma: Diagnosis by magnetic resonance imaging. Radiol Med 8: 17—19, 1990

A CASE REPORT OF URACHAL SMALL CYST COMPLICATED BY A URACHAL CANCER

Noriharu MIKATA, Sadao IMAO and Kiyoshi NAKAMURA

Department of Urology, Tokyo Metropolitan Bokuto Hospital

A 69-year-old woman was seen at the clinic because of burning during urination repeatedly over about one year. Cystoscopic examination showed a small cystic mass on the dome of the bladder and biopsy revealed atypical cells. Partial cystectomy with resection of the umbilical urachus was carried out. Histopathological diagnosis was urachal small cyst complicated with a cancer on the wall.